

【最優秀賞】愛媛県人権擁護委員連合会長賞

「小さい命とともに生きる」

愛南町立城辺中学校 3年 高田心優

私は今十五歳。四人姉弟の長女です。下は全員弟で、一つ、五つ、六つと年齢が離れています。私達姉弟は仲が良いです。いつもくだらないことを話してはゲラゲラと笑い、お互いにムツとしたとしても、翌日にはけろりとしています。

特に次男は、家族の中で誰よりも優しく、誰よりも一日一日を楽しんでいます。家族がけんかをしていれば、ポロポロと涙を流し、けんかをやめてほしいと言います。うれしいことや楽しいことがあればオリジナルの歌を歌い、踊り始めます。たまにこちらがイラっとする発言をしますが、とてもかわいくて、心優しい弟です。しかし、そのような弟は生まれたばかりの頃、生死をさまよひ、一生完治することのない大病にかかっていたのです。

私がまだ六歳の頃に、次男は県外の母子センターで生まれました。生まれる前から状態が悪いことが分かっていたからです。六歳の私はいとこの家に預けられたり、家に残されたりと、母から離れることが多くなりました。お腹の赤ちゃんのためだと分かりはしても、母と離れるのは寂しくて嫌々従っていました。赤ちゃんが生まれてある程度月日が流れたときに、赤ちゃんに会いに行くことが決まりました。弟に会ったことは覚えているのですが、理由はよく覚えていませんでした。当時の次男は死んでしまう可能性が高かったので、最期に家族に合わせるためだったそうです。

弟は横隔膜ヘルニアという難病にかかっていました。横隔膜ヘルニアとは、横隔膜に穴があいており、本来であればお腹の中にあるべき臓器の一部が胸の中に移動してしまう病気です。それだけでなく頭の中に水がたまってしまう水頭症や慢性腎臓病も併発していました。次男の横隔膜ヘルニアはひどく、横隔膜が

ほとんどない状態だったそうです。次男のお腹にはたくさんの手術痕があり、お腹や頭の中にはチューブが通っています。将来的には人工透析が必要になるかもしれません。次男は生まれながらに難病にかかり、さらに二つの大きな病気にかかっていました。

そのため弟は、身体接触の激しい球技には制限があります。なぜなら、頭にあるシャントが壊れてしまうかもしれないからです。同級生や兄弟と楽しそうにサッカーをしている弟を見ると、「もしかしたら、自分の好きなことができなくなるのかもしれないな。」と考えてしまい、少し悲しくなってしまうことがあります。また、病気の影響で次男は小柄です。そのうち同年齢の人たちと自分を比べることもあるでしょう。年齢が上がるにつれて、辛く思うことも増えるのではないかと心配です。本人はいつもは能天気ですが、他人の発する言葉に敏感で、繊細な性格の持ち主でもあります。そのため、少しのからかいやいじりで傷ついてしまうかもしれません。実際、その時になってみないと分かりませんが、本当に心配です。

彼は今までにたくさん痛い思いや怖い思い、苦しい思いをしてきました。きっとこれからもたくさん辛い思いをしないといけないと思います。私はその思いを弟の代わりに受けることはできないけれど、支えることはできると思います。

次男は、見た目は至って普通の男の子です。一目見ただけで辛い思いをしてきた子だと分かるわけではありません。だから、これから新しく出会う人たちには、理解してもらえないかもしれません。中には、彼自身がしたいと思ってもできないことがあることを見て、それを怠慢だと言う人が現れるかもしれません。しかし、私はそれを声に出してほしくはありません。誰一人として同じ人間はいません。一人ひとりの違いを認め、その人にはその人なりの辛さや困難を持っていることを思いやってほしいと思うのです。彼以外にも、病気や事故などで辛い思い

をしている人たちがいます。彼らの苦しみは本人以外が理解することはできません。でも、私たちはその人と仲良く遊んだり、話したりすることで、彼らの思いを少しずつでも理解していくことができます。彼らが自分たちに課せられた制約だと感じるものを、制約だと感じることなく生きていける社会の実現を願っています。

私は弟たちのことを常に気にかけていられるような立派な姉ではありません。しかし、誰かが困ったときには手を差し伸べ、頼られる存在になりたいです。

私の家族はとても騒がしいです。そして、毎日がとても楽しいです。それはこのメンバーだからこそだと思います。あのとき失われていたかもしれない命が、今、ここにあることに感謝し、これからも私の周りの人たちの人生が平和であること、そして高田家が騒がしくあることを願います。